成城民俗学の系譜

～民俗学研究所編～

松崎憲三

はじめに

平成五年（一九九三）九月に『成城大学民俗学研究所　二〇年の歩み』が刊行されたが、「第三章　研究」の執筆を担当したのはほかならぬ筆者であった。[1] 昭和三十八年（一九六三）に開設された柳田文庫・民俗資料室、昭和四十八年（一九七三）の民俗学研究所設立を経て平成四年（一九九二）に至るまでを仮に第一期とすると、それから二〇年以上も経過しており（平成二十六年までを第二期とする）、その間民俗学を中心としながらも学際的研究が推進され、少なからぬ成果をあげている。そこで今後の新たな研究の展開を期すために、改めてこの二〇年ほどの足跡を回顧することにした。

本研究所の研究活動は、定期的に開かれる所員研究例会と共同研究、そして委託研究が主たるものであった。このうち委託研究は、柳田國男の遺志に基づいて、南島研究を推進するために設けられたものと言って良い。昭和四十九年（一九七四）から三年継続で、大藤時彦が「沖縄の口承文芸」なるテーマでこの種の研究に先鞭をつけ、昭和五十八年（一九八三）の平敷令治「沖縄本島の門中墓に関する調査」なる研究をもって一応の終止符が打たれた。これら委託研究に基づく成果は、『民俗学研究所紀要』の各号に収録されている。

一方、現在の所員研究例会の前身ともいうべき「年中行事研究会」が発足したのは昭和三十四年（一九五九）八月である。この研究会は本学教員にとどまらず、学外研究者を交えて行われ、しかも民俗学と歴史学という二つの学問の接点をさぐる共同研究といった色彩を帯びたもので、個別行事ごとに検討を重ね、都合三〇回にわたって行われた。この研究会にひき続いて「通過儀礼研究会」が発足し、同様の方式で研究がなされた。しかし、昭和四十八年（一九七三）に民俗学研究所が設立されて以降、柳田文庫・民俗資料室当時と異なり、所員研究例会はもっぱら個人研究の成果を発表し、情報交換を行う場となっており、共同研究は別の形で組織化されるよう

になった。

現在行われている共同研究には、さまざまな研究助成金の交付を得て実施する大型の共同研究（特別研究）と研究所の経費による小型の共同研究（プロジェクト研究）がある。前者の第一期の代表例が日本学術振興会の研究助成を得て、昭和五十九年（一九八四）から六十一年（一九八六）に至る三年間にわたって実施された「山村生活五〇年、その文化変化の研究」（代表者・主事野口武徳、後主事・我妻健治）である。共同研究にはもう一つ、所蔵資料の整理と解題の作成といった、基礎的調査・研究がある。以下第二期の共同研究の足跡を、先ずはこの基礎的調査・研究から見ていくことにした。

一、基礎的調査・研究と特別研究

いずれの共同研究も、内外の五、六人から十数人のメンバーで、おおむね研究期間は三年であり、三年目の終了時あるいは四年目に成果を公表する、というのが約束事である。

民俗学研究所の「柳田文庫」は、民俗学関係のものが中心であるが、人文科学の多方面に及ぶ資料に満ち溢れており、これらの資料を整理し解題を作成し公刊することは、研究の進展に資するための必要な作業である。大変地味であり、また労力を要するものだが、これを基礎的調査・研究と位置づけ、所員を中心としながらも時には外部の研究者の協力を得て実施している。その成果刊行物を記すと次の通りである。

（a）川部裕幸・田中宣一・森田晃一・吉原健一郎編　一九九三「『諸国叢書』目録」『民俗学研究所紀要』第一七集。

（b）民俗学研究所編〈編集代表・田中宣一〉一九九五『日本の食文化　補遺編』岩崎美術社（「食習採集手帳」橋浦泰雄旧蔵資料集録）。

（c）伊藤幹治編　一九九八「柳田國男とヨーロッパの民族学・民俗学」『民俗学研究所紀要』第二二集別冊。
（d）民俗学研究所編（編集代表・伊藤幹治）一九九九『柳田文庫蔵　南島文献解題』砂子屋書房。
（e）民俗学研究所編（編集代表・松崎憲三）二〇一五「『山村採集手帳』C、D」。
（f）民俗学研究所編（編集代表・松崎憲三）二〇一五「『沿海採集手帳』、『海村採集手帳』C、D」。

なお、多少（c）とかかわるものとして、高木昌史編二〇〇六『柳田國男とヨーロッパ～口承文芸の東西～』（三交社）をあげることができる。その構成は次の通りである。

第一部　柳田のヨーロッパ口承文芸研究
第二部　昔話・伝説の東西
第三部　テーマ研究

第一部は、柳田の口承文芸論成立の特色を、柳田文庫所蔵の英語・独語・仏語文献調査を踏まえてクローズアップさせたものである。それに対して第二部以降は、日本の口承文芸論における柳田の位置を確認し、さらにそれを発展させ、比較研究の土台構築をめざしたものといえる。

次いで特別研究に移る。いずれも私学振興・共済事業団の研究助成を得たものである。

（1）田中宣一・小島孝夫編　二〇〇二『海と島のくらし～沿海諸地域の文化変化～』雄山閣。

柳田文庫には、日本の村落社会を対象とした総合調査の先駆けをなす、貴重な資料が三種類存在する。いずれも柳田の主導のもとに実施された調査記録である。その一つは昭和九年から十一年（一九三四～三六）にわたる「山村調査」にかかわるもの、二つ目は昭和十二年から十四年（一九三七～三九）の「海村調査」にかかわるもの、三つ目は昭和二十五年から二十七年（一九五〇～五二）の「離島調査」にかかわるものである。農山漁村は長年わが国の経済、社会、文化の基調をなすものであったが、高度経済成長とともに変貌を余儀なくされた。これら

の資料は、変貌をとげる以前の農山漁村の文化、社会の実態とそれ以降の文化、社会の変化を知る上で貴重この上ない資料である。先に触れたように、第一期の昭和五十九年から六十一年（一九八四～一九八六）には、「山村調査」の資料を活用した調査・研究を実施しており、既に成果を公表している。本研究もそれに続くものであり、「海村調査」、「離島調査」の資料を用い、海をめぐる近現代における伝承文化の変化に分析を加えたものである。その構成は以下の通りである。

○総論編

一、「海村調査」、「離島調査」とその成果の活用

二、沿海地域社会の変化

三、漁撈活動の変化

四、信仰生活の諸相

五、日常生活の展開

○資料編　一五か所の追跡調査

これらの報告、論考を通じて、沿海諸地域の社会構造、経済生活、諸習俗さらには価値観等々とその後の変化、および変化の要因について分析を試みている。

（2）松崎憲三編　二〇〇七『諏訪系神社の御柱祭～式年祭の歴史民俗学的研究～』岩田書院。

諏訪大社は、特異な神社形態および特殊な祭祀の存在によって古くから注目を集めてきた。御柱祭の研究に関しては、柱立ての持つ意味についてはそれなりに研究蓄積があるものの、祭祀形態や祭祀組織の歴史的変遷については、また六年（七年目）ごとの寅年と申年に行われる諏訪大社上社・下社（これらを大宮と称する）の御柱祭はあまねく知られているものの、諏訪地方の氏神（これらを合わせて小宮と称する）、さらには祝神、道祖神などの祭において実施されているものについては、あまり関心が注がれてこなかった。さらには長野県外の諏訪神社

でも、御柱祭やそれに類似する祭が存在するにもかかわらず、こちらも問題視されてこなかった。

本研究は、平成十六年、十七年（二〇〇五、〇六）の申・酉年に照準を合わせ、大宮のみならず小宮、あるいは各地に存在する諏訪系神社における御柱祭りや柱立ての調査・分析を行った。とりわけ御柱祭にかかわる人々が、時代状況や社会状況に対応しながら何を取捨選択し、伝統的なものを継承してきたのか、またいかなるものを加えながら再編し今日に至ったのか、といった問題を課題に据えて取り組んだ。その成果報告は以下の三部構成である。

第一部　大宮・小宮の御柱祭

第二部　長野県内および隣接地域の御柱祭

第三部　御柱祭の周辺

第一部および第二部はおよそ推測がつくものと思われるので、第三部について補足するならば、故坪井洋文が取り上げた山の神信仰関連の式年祭や、浜降り神事（これも周期的に行われる祭である）と、盆の柱松や小正月を中心とする道祖神祭における柱立て行事に言及することにより、御柱祭の特徴を浮きぼりにしようと設定したものである。

（3）小島孝夫編　二〇一五『平成の大合併と地域社会のくらし～』明石書店

本研究は、「平成の大合併」による地域社会の再編に際して、人々が共有する危惧や期待をはじめとしたさまざまな心意を検証することを通して、人々が描く地域社会像や現代社会における集団生成の思惟を明らかにすべく努めたものである。調査・分析対象地域には「山村調査」、「海村調査」関連地域を設定しており、『山村生活五〇年～その文化変化の研究』、『海と島のくらし～沿岸諸地域の文化変化～』といった特別研究の流れに連なるものである。成果報告の構成は以下の通りである。

○論集編

第一部　町村合併の歴史的展開
第二部　地域社会の生活文化や思惟の変化
第三部　合併に対する受容と対抗
第四部　地域社会の現状と課題
○資料編　一二地域の追跡調査

資料編では「山村調査」、「海村調査」あるいは『山村生活五〇年』の成果を念頭に、今次の合併に至るまでの経過、合併後の生活の変化について記述しており、論集編の根拠を成すものである。その論集編においては、平成の大合併に至るまでの歴史的展開を踏まえて、今次の合併に対する当該地域の受容、対抗過程を検証し、今次の合併を経験した地域の現状と課題を明確にしている。

二、プロジェクト研究

プロジェクト研究は、研究所の予算による比較的小規模なものであるが、常に四つほどのプロジェクト研究が並行して研究活動を実施しており、着実に成果をあげていると言える。

（1）田中宣一・松崎憲三編　一九九五『食の昭和文化史』おうふう。

昭和十六、十七年（一九四一、四二）に、民間伝承の会（日本民俗学会の前身）によって食習俗に関する全国調査が実施された。そのデータが「食習採集手帳」として民俗学研究所に保管されており、この貴重な資料は、『日本の食文化』として本研究所の手によって刊行された[2]。これを機に、昭和初期における食習俗の実態とその後の変化、今日的課題を把握すべく結成されたプロジェクト研究の成果が、本研究にほかならない。

柳田が『明治大正史世相篇』の「食物の個人的自由」の中で論じた近代の食習俗の変化に関する指摘について、

『日本の食文化』記載内容と対比させながら検証を試みた論稿、所謂「御馳走」の歴史的変化を分析した論稿、雑穀や粥に対する価値観について分析したもの、鍋・釜と火所としてのイロリ・カマドの対応関係や、調理担当者に焦点を当てた論稿が収録されている。

（2）松崎憲三編　一九九八『近代庶民生活の展開〜くにの政策と民俗〜』三一書房。

民俗とは、一定の時間幅をもって伝承されてきた言語、行為、観念、事物にほかならないが、言うまでもなく時代ごとの政治・経済・社会状況に対応しつつ繰り返され、あるいは再編されてきたものである。必ずしも、連綿として同じ型のものが伝えられてきた訳でもない。しかも変貌著しい「近代」という時代を経て今日に至っているのである。にもかかわらず、「近代」を無視して近世（あるいはそれ以前）と直接的に結びつけて民俗諸事象を把握するといった傾向もみられた。こうした研究姿勢に対する反省機運がようやくおこり、一方では現代にも関心が注がれるようになり、その前提として「近代」を相対化する必要性が認識され始めた。本研究も、民俗学の視点から「近代」あるいは「近代化」を見据えるべく計画されたものである。

ご承知のように、近代日本は積極的に西欧文化を吸収し、また近代国家の建設をめざしてさまざまな政策を推進してきた。それによって伝統的な社会、文化との間に激しい対立、葛藤を生み出したが、一方では新しい社会、文化が創造された。そうした中で民俗はどう息づいて来たのか。あるいはどのように再創造され、もしくは何故消滅したのか。これらの解明が、本研究の課題である。

民俗学徒は、自治体史作成や文化財保護との関係で行政・政治とかかわりながら、一方で政治的施策とは距離を置くという姿勢を貫いてきた。ちなみに神島二郎は、民俗学研究所の公開公演において、柳田の教育勅語批判や『国史と民俗学』、『神道と民俗学』を引き合いに出しつつ、「柳田さんは彼なりに当時においても、道理に反することに対しては、きちっと反論して誤りを指摘することを怠っていなかった」と指摘し、柳田の学問と思想を下からのナショナリズム、下からの近代化をめざしたものと結論づけている。[3] 柳田の研究姿勢には及ぶべくも

ないが、多少なりとも近づくべく努力が必要であり、本研究はそのささやかな努力の成果の一つである。このほか先の特別研究で言及した小島孝夫編『平成の大合併と地域社会のくらし』、後ほど触れる田中宣一編『暮らしの革命』も、同様に国や自治体の政治的施策と民俗との対応関係を課題としたものである。ちなみに本研究の成果の内容は、

第一部　生活のリズムとその変化
第二部　神社祭祀・祖先祭祀
第三部　戦争をめぐるフォークロア

以上であるが、扱ったテーマは明治の改暦と年中行事・地方改良運動と民俗、神社合祀と復祀、国の宗教政策と葬制・墓制・先祖祭祀、戦没者祭祀や戦争をめぐるフォークロア等々である。主として近代国家が推進した政策と民俗との対立、葛藤の様相、および民俗が再編されつつ息づいてきたプロセスを跡づけようと試みたものである。

（3）松崎憲三編　二〇〇二『同郷社集団の民俗学的研究～都市と農村の交流～』岩田書院

近代以降、向都離村によって東京、大阪ほかの都市に居住するようになった出郷者（離郷者）達は、都市という異質な社会の中で結節を求めて同郷者集団を結成した。同郷者集団とは「故郷をともにする・都市部を中心とする居住者達の集まり」にほかならないが、そのあり方はまちまちである。上層階級の出郷者を組織した県人会と、一般庶民が組織した郷（土）人会とを区別すべきであるとの見解も示されているが、両者を視野に入れて研究を進める必要があるとの立場から、同郷者集団なる用語を用いることにした。成果報告の構成は次の通りである。

第一部　同郷者集団の実態
第二部　職業・学業と故郷
第三部　都市と農村の交流

都市に移住した出郷者達はその後どういった生活を送り、また故郷にどのような思いを描いているのか。さらには彼等が所属する同郷者集団は、どういった役割を担っているのか。一方地方に在住する人々は、出郷者を中心とする都市人に何を期待し、自らの生活地をいかに維持、再編しようとしているのか。こうした問題の解明が本研究の目的である。同郷者集団の分析を中心としながらも、都市と農村の交流を視野にアプローチした点に、本研究の特徴があるといえる。

（4）小島孝夫編　二〇〇五『海の民俗文化～漁撈習俗の伝播に関する実証的研究～』明石書店

漁撈技術や漁撈儀礼といった漁撈習俗について、黒潮流域（対馬流域も含む）の事象を対象として、その伝播過程の実証的把握を試みたものである。研究報告は、

序論　なぜ、今「伝播」を問うのか

第一章　佐渡と石見漁師の伝承

第二章　「改良」と呼ばれる技術の伝播

第三章　丹後ブリ大敷網導入前後

第四章　移住地域における民俗文化の空洞化と組織化

第五章　漁撈習俗伝播の諸相

第六章　総括にかえて

以上六章構成である。文化の伝播に関しては、発信側と受信側双方に視点を当ててそのプロセスを検証する作業が必要なものの、それはなかなか容易でない。また五人という少人数のプロジェクトメンバーであるが、伝播の捉え方は微妙に異なり必ずしも一様ではない。その分多様な伝播の捉え方を提示しており、今後の研究の進展に資する所は大きい。

（5）田中宣一・小島孝夫編　二〇〇九『半島のくらし～広域民俗誌の試み～』慶友社

民俗学においては、自然村とも言うべきムラ程度の地域、あるいは明治行政村程度の地域を対象に民俗の全体像を民俗誌として記述することが一般的で、多くの蓄積もある。その一方、東京教育大学の和歌森太郎を中心とする一連の広域民俗誌、九学会連合による広域総合調査の実施例があるものの、[4]それ以降は途絶えている。本研究は改めて愛知県知多半島の伝承文化の全体像を把握すべく努めたものである。その成果報告の構成は、

第一章　「広域民俗誌」作成に向けて
第二章　知多半島の概要
第三章　半島全域を対象とした問題
第四章　半島南部の個別事例研究

以上である。「半島とは何か」について論じた後、知多半島の歴史的、民俗的概要に触れ、そのうえで生活感覚としての方向認識、霊場巡拝と観光、風水害からみた半島の変化といったトピカルなテーマで半島全体像の特徴を把握するとともに、半島南端部に焦点を当て、生業・通過儀礼・墓制に限定して分析を加えたものである。

（6）松崎憲三編　二〇一〇『小京都と小江戸〜うつし文化の研究〜』岩田書院

「小京都」、「小江戸」なる言葉はよく耳にし、目にもするしあまねく知られているものの、先行研究は少ない。そこで「うつし」文化という視点から分析できるのではないか、と思い立って手がけたのが本研究である。ちなみにここで言う「うつし」文化とは、モデル地域の景観や文化の象徴的な部分を移入、再構成し、そのうえでモデルとなる地域の名を冠したものにほかならない。雅びた文化、華やかな文化への憧憬と、その繁栄にあやかりたいという心意がその背景にある。

「小京都」への志向は古くから為政者の間に存在した。藤原氏による奥州平泉、応仁の乱によって京都から下向した公家による土佐中村、大内氏による山口や徳川氏による江戸の町造りが主だったものである。しかし、にわかに増えたのは高度経済成長期の旧国鉄によるキャンペーン（ディスカバージャパン）以降である。地域側は歴

史的風土や文化の観光資源化を目論見、訪れる側は日本的なもの、心の故郷を求めたためである。一方、「小江戸」についても、それらしさが形作られたのは幕末から近代初頭にかけてであるが、「小江戸」と銘うったのは近年のことである。ともあれ両者とも、モデルと緊張関係を持ちつつそれを模倣し、身の丈に見合ったものに整えながら独自の文化を育んできた。そのプロセスを辿りつつそれぞれの地域が抱えている問題を探る、これが本研究の目的であり、成果報告は、

第一部　小京都をめぐって

第二部　小京都と小江戸の狭間で

第三部　小江戸をめぐって

以上の三部構成である。「小京都」として山口、津和野を取り上げ、「小江戸」として旧佐原市、栃木市を取り上げたが、「うつし」文化の数少ない研究書と言えるとともに、「小京都」、「小江戸」の狭間にあって揺れ動く金沢、静岡県下のマチを取り上げたことも、特徴の一つと言えよう。

（7）田中宣一編　二〇一一『暮らしの革命～戦後農村の生活改善事業と新生活運動～』農山漁村文化協会

研究代表者である田中は、既に「生活改善運動と民俗の変化」、「生活改善運動と民俗」なる先行論文をまとめているが、[5] こうした実績を踏まえて組織化されたプロジェクト研究の成果である。第二次世界大戦後、当時の農林省が推進した生活改善事業と、新生活運動協会で主導した新生活運動を本研究では新生活運動諸活動とし、それらを立案した「官」の論理ばかりでなく、それを受容した「民」の論理を視野に入れつつ、その実態を分析したものである。成果報告の構成は以下の通りである。

第一章　生活改善事業と新生活運動

第二章　生活改良普及員の地域活動

第三章　地域における食住生活の変容

第四章　生活改善、新生活運動から地域づくりへ

先ず第一章では、中央において「官」が思い描いていたそれぞれの運動の全体像をまとめ、第二章では、現地においてこれらの運動を推進した人々からみた運動の実態を記述している。次いで第三章では、食と住生活を中心に当該地域で改善がどのような形で実践されたのかについて報告し、最後の第四章では、生活改善事業および新生活運動の個々の問題点と、地域の再生がどのように関連しているのかについて、分析がなされている。

（8）松崎憲三編　二〇一四『人神（ひとがみ）信仰の歴史民俗学的研究』岩田書院

祖霊・御霊信仰を含む人神信仰は、現世利益信仰とともに民俗信仰の中でも重要な位置を占めている。柳田の「人を神に祀る風習」（『民族』二巻一号　一九二六年）以来の研究蓄積があり、近年小松和彦の『神になった人びと』（淡交社　二〇〇一年）等々によって、御霊を中心とした人神信仰の枠を超えた研究の可能性が提示された。ちなみに本研究は「人神信仰の歴史民俗学的研究」と銘打っているが、仏式のホトケも合わせて研究対象としている。神仏習合が背景にあるということも一つの理由であるが、神式を採用するか仏式を選ぶかは便宜的なものにすぎず、共通の観念が見出せるものと判断したからである。また隠れキリシタンの人神信仰に言及しているのも、その分析を通して民俗的神観念を抽出しうると考えたからにほかならない。成果報告の構成は、

第一部　鎌足、信長、秀吉の信仰と祭祀

第二部　東照宮および藩祖、藩主の信仰と祭祀

第三部　人神信仰の多様性

以上である。鎌足、秀吉等古代、中世以来の人神から、家康、藩祖・藩主、義士、義民等近世、近代に至るまでの人神を対象としているが、中世末～近世初頭、そして近代、戦後から現代というこの種の信仰の転換点に留意しつつ分析を加えている。また近年の研究動向にかんがみ、顕彰神や各種イベントに担ぎ出された「人神」について論じたものもある。

三、グローカル研究センターの共同研究

日本常民文化および美学美術史専攻を中心とする大学院文学研究科と民俗学研究所は、平成十六年（二〇〇四）十二月十八日に、米国、韓国、国内の研究者を招聘し、図書館ＡＶホールにおいて「『地域』をどうとらえるか～ローカル文化の継承と再創造」なる国際シンポジウムを開催した。「地域」それぞれには、今日に至るまで固有の歴史的な流れがあり、その中で培われてきた有形、無形の文化が存在する。しかしグローバル化が進展する中でこのような地域文化も著しい変化を来たしており、今後地域文化をどう継承していくべきなのか、あるいは時代に対応する形でどのように再編すべきかといった問題意識から活発な議論が交わされた（同シンポジウムの報告書は、平成十八年三月に同名のタイトルで、文学研究科・民俗学研究所より刊行されている）。実はこの国際シンポジウムを経て立案されたのが、グローカル研究にほかならない。

平成二十年（二〇〇八）に民俗学研究所所員（主として兼務の日本常民文化専攻の教員）が中心となって、「グローカル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究」（研究代表・松崎憲三民俗学研究所長二〇〇八～二〇一〇年度の三年計画）なるテーマで、文部科学省の「平成二十年度（二〇〇八年度）私立大学戦略的基盤整理事業（研究拠点を形成する研究）」に応募し、幸いなことに採択された。この採択を受けて、同年十月にグローカル研究を実施・推進する目的で、民俗学研究の下に設置されたのがグローカル研究センター（センター長・上杉富之教授）である。その後、平成二十三年（二〇一一）に再び「社会的・文化的複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローカル研究拠点の形成」（研究代表・上杉富之グローカル研究センター長　二〇一一～二〇一五）の五年計画なるテーマで同事業に申請し、これも採択された。これを機に、グローカル研究センターは独立することになった（研究機構所属）。以上のような経緯に鑑み、平成二十年からの最初の共同研究についてのみ、ここでそ

の足跡を辿ることにしたい。

ちなみに、グローカル研究については上杉がその枠組みを提示している。上杉によれば「グローバリゼーションとローカリゼーションが同時かつ相互に密接に影響を及ぼしながら展開するグローバリゼーションの概念」を基に、「グローバリゼーションとローカリゼーションの共振を対象化」するのが「グローカル研究」であり、それは「グローバリゼーションを前提としつつもローカルな場に焦点を置いた研究」だという[6]。以上を前提に四グループ（四テーマ）に分かれて共同研究を実施し、

（1）小田亮編　二〇〇九『グローカリゼーションと共同性』民俗学研究所グローカル研究センター刊

（2）小島孝夫編　二〇一〇『地域社会、地方文化再編の実態』同刊

（3）小澤正人編　二〇一一『グローカリゼーションと文化移転』同刊

（4）上杉富之編　二〇一一『グローカリゼーションと越境』同刊

以上四冊の成果報告書が刊行されている。（1）、（4）といった文化人類学関係の成果は、その学問の性格上グローカル研究に対応しやすいが、その他の分野の成果については、「グローカル化」といった概念が新しいことから、研究自体は手さぐりの状態で行われた。そのためその評価は第三者にゆだねたい。ここでは、日本歴史学と日本民俗学との共同研究である（2）に言及するにとどめたい。

日本の地域社会を対象とする場合、何をもってグローバルなものとし、さらにそれがローカル化していく交錯過程をどのような視点から検証するのか、この点が課題としてクローズアップされた。しかし、日本歴史学と日本民俗学とでは研究手法が異なり、なかなか接点を見出すことができず、各自の事例研究の題材に応じて模索していくことになった。

第一章、篠川賢の「『磐井の乱』とその後」は、北九州の豪族である磐井がヲホド大王（継体天皇）を頂点とするヤマト政権と戦って敗れた事件を例に、ヤマト政権による「グローバル化」の展開を示す指標の一つとして、

地方支配の過程を検証したものである。第二章、外池昇の「沖縄における王陵の文化財としての保存と活用について～天山陵と伊是名玉御殿～」は、「皇室典範」（昭和二十二年制定）が規定する「陵」を本土におけるグローバルなものとし、沖縄の王陵を宮内庁が陵墓として管理していない状況をローカルな現象とした上で論を進めたものである。王陵・天皇陵各々の歴史的経緯と、文化財としての保存・活用について両者の比較を試みている。

第三章、松崎憲三の「民俗信仰を通してみた地方文化再編の実態～下越地方の曹洞宗寺院と優婆尊信仰～」は、新潟県下越地方の優婆尊信仰を題材として、曹洞宗教団の布教（グローバルな展開）に対する、末寺や地域社会の人々の（ローカルな）対応過程を明らかにしたものである。すなわち、曹洞宗教団にあっては中世以降葬祭仏教化、「神人化度伝説」の活用等、地域社会に受容されやすい施策を打ち出した。一方最前列にある末寺はこれらを背景に、地域社会の人々と接しながら布教のあり方、信仰のあり方を模索してきた。対する地域社会の人々は、それぞれの宗教的欲求に基づいてさまざまな信仰を取捨選択する一方、社会状況の変化に対応しつつ独自の信仰を培ってきた。こうした末寺と地域社会とのかかわり、いわば仏教の民俗化と民俗の仏教化との相互作用の歴史の中で、重層的かつ多様な民俗が育まれてきた、と結論づけている。第四章、及川祥平の『近代の贈位と人物顕彰をめぐる基礎的考察～新聞資料の分析から～』は、ローカルな価値観とナショナルな（あるいは個々のローカルな場、集団を超えたレベルで共有される）価値観との交錯によって、歴史上の人物が郷土の偉人や「ゆかり」の人物として立ち現れてくることに着目し、近代の贈位とそれに対する各地の対応を、新聞資料を用いて明らかにしたものである。

第五章、田中宣一の「野生動物への対応とグローカリゼーション」は、地域社会における野生動物と人間との関係を対象に、近年の野生動物に対する動物愛護、動物保護思想の普及をグローバルな存在と位置づけ、野生動物への対応に苦慮する地域社会の人々の実態を分析したものである。最後の第六章、小島孝夫の「地域社会におけるグローバル化への対抗の実態～東京都御蔵島の事例～」は、近世家扶持米制度によって島内生活を維持して

きた御蔵島では、近代的な国家制度に組み込まれていく過程で、貨幣の存在が重要なものとなり、島内の生業は換金を前提としたものへと推移して行った。その点を踏まえて資源利用を題材に、島内で行われてきた換金活動を分析し、島外社会への対応の実態を明らかにしたものである。

以上であるが、日本歴史学や日本民俗学は元来地域や地域性の存在を前提とする学問分野である。一般にグローバルとローカルは、国際性と地域性という対比に置き換えられようが、ここで紹介した論稿の多くは、グローバリゼーションを前提としたナショナルレベルの動きと、ローカルレベルの動きの対比で捉えているものが多かった。その点で言えば、グローバルとローカルは、全体地域と部分地域との対比で把握されている、と言って良いかもしれない。

さて、第二期のグローカル研究は、民俗学研究所から独立したグローカル研究センターによってなされている。しかし、シンポジウム等においては相互に協力して開催することもあり、平成二十四年（二〇一二）七月二十八日には、柳田國男没後五〇周年記念シンポジウム「国際化の中の柳田國男～『遠野物語』―以前／以後～」が共催で開催された。元カリフォルニア大学教授・R．A．モース氏と東京学芸大学教授・石井正己氏をお招きして行ったもので、その内容は『現代思想』二〇一二年十月臨時増刊号「柳田國男『遠野物語』以前／以降」特集（青土社）に掲載されている。

結びにかえて

以上、ここ二〇年ほどの民俗学研究所における共同研究の足跡を辿ってきた。いずれの研究も学部・大学院を本務とする兼任の所員を中心に、外部の研究者を含めて五、六人から十数名の構成メンバーで、三年間を目安に実施されるものだった。オーバードクターの研究員も加わることが少なくなく、共同研究は若手研究者の育成と

いう役割も担っており、現に多くの研究者を輩出している。

共同研究の大まかな傾向をみると、先ず柳田文庫所蔵の貴重資料、すなわち「山村採集手帖」、「沿海採集手帖」、「食習採集手帖」あるいは「南島文献」や「諸国叢書」等を整理し、解題を作成したうえで公刊するという基礎的調査・研究があり、これは第一期にひき続き、第二期の当初に行われた。次いで、その成果を活用し、民俗変化の要因を探る研究がなされた。『食の昭和文化史』、『海と島のくらし』がその主たるものであり、さらにこれらや追跡調査の蓄積の上に次の段階の研究がなされており、その一例が『平成の大合併と地域社会のくらし』である。

一方、民俗学徒が従来避けてきた、政治・行政と民俗学との関係、諸政策と民俗（地域社会）との対立・葛藤、あるいは諸政策への適応について、田中、松崎、小島等の民俗専攻の所員は割と早くからこの種のテーマを手がけており、そうした蓄積の上に共同研究が次々と組織化された。これも本研究所の共同研究の特徴の一つであり、『近代庶民生活の展開』、『暮らしの革命』、『平成の大合併と地域社会のくらし』がその成果である。

もう一つの柱は、柳田が民俗学研究の中核に据えた民俗信仰関連の研究であり、第一期の研究において、先ず最初に掲げたテーマもこの種の「民間呪術〜宗教者と地域住民〜」と題するものであった。第二期もそれが引き継がれ、『諏訪系神社の御柱祭』、『小京都と小江戸』、『人神信仰の歴史民俗学的研究』として結実している。伝統的テーマの中から取り残された課題を掘り起こすとともに、新しいテーマを見出し、実証的な研究を目ざす。これが成城民俗学の基本的スタンスであり、柳田の人となり学問を論評する類の研究とは無縁である。

なお、隣接分野でも活発に研究がなされ、その成果も少なくないが、一覧表に掲げるにとどめたい。また学際的研究は、ヨーロッパ文化、英文学、国文学、民俗学専攻の所員の協同による『柳田國男とヨーロッパ』のほか、民俗学と歴史学、歴史学と国文学との間の共同研究の成果は少なからずあるが、より積極的に取り組む努力が必要といえる。

隣接分野の共同研究による成果一覧

（1）　小峯和明・篠川賢編　二〇〇四『日本霊異記を読む』吉川弘文館。
（2）　小島孝之・小林真由美・小峯和明編　二〇〇八『三宝絵を読む』吉川弘文館。
（3）　篠川賢・増尾伸一郎編　二〇一一『藤氏家伝を読む』吉川弘文館。
（4）　小林真由美・北條勝貴・増尾伸一郎編　二〇一五『寺社縁起の古層～注釈と研究～』法蔵館。
（5）　小澤正人　二〇一五『中国における造形と信仰の諸相』成城大学民俗学研究所

註

（1）　松崎憲三　一九九三「研究」『成城大学民俗学研究所　二〇年の歩み』同所刊　二七～五一頁。
（2）　成城大学民俗学研究所編（編集代表・田中宣一）　一九九〇『日本の食文化』岩崎美術社　一～六六七頁。
（3）　神島二郎　一九八五「柳田國男の学問と思想」『民俗学研究所紀要』九集　同所刊　一～二〇頁。
（4）　和歌森太郎は一九五八年の国東半島の民俗調査以降、志摩、津軽など九ヶ所の調査を行い、報告書をまとめている。一方九学会連合も、一九五〇年の長崎県対馬に始まり、能登半島以下、一九七五年の奄美諸島調査報告に至る八冊の総合調査報告書を刊行している。
（5）　田中宣一　一九九〇「生活改善運動と民俗の変化」『昭和期山村の民俗変化』二〇三～二三七頁。同二〇〇四「生活改善運動と民俗」『民俗学論集』一九　相模民俗学会
（6）　上杉富之　二〇〇九「グローカル研究構築に向けて～共振するグローバリゼーションとローカリゼーションの再対象化～」『日本常民文化紀要』二七輯　成城大学大学院文学研究科　四三～七五頁。
（7）　田中の業績については註（5）参照。松崎憲三　一九九五「村是と風俗改良」『南河内町史民俗編』南河内町一〇一三～四四頁。小島孝夫　一九九九「離島振興法と離島の生活」『民俗学研究所紀要』二三集　同所刊　三七～七〇頁。

（成城大学文芸学部教授
民俗学研究所所長）